

飽きもせずに大相撲観戦雑記
<平成 25 年 3 月場所を終えてひとこと>

<1> 白鵬 9 回目の全勝優勝

初日の白鵬は一瞬ヒヤリとするような場面があり気になったが、二日目以降見事に立て直したばかりか全勝優勝を果たしてしまった。膝の角度、腰の位置、そこから繰り出す見事な「腰で体を運ぶ」動き。

相手に充分に取らせても、機を見るに敏、素早い身のこなしが相手の追隨を許さない。盤石の相撲ぶりで文句の付けようがなかった。9 回目の全勝優勝は双葉山・大鵬を抜いて史上トップ、今後まだ何度かの上積みがあるだろうし、優勝回数などその他の記録も合わせると、「凄い横綱を生で見ることができた」という時代の生き証人の気分になることができた。

一方の日馬富士は惨憺たる結末となったが、私見では予測の範囲内のような気もしなくはない。連続全勝優勝を引っ提げて横綱昇進を果たしはしたが、大関時代の成績を見ると数場所周期で 8 勝 7 敗や 9 勝 6 敗を繰り返している状況だったので、私は不安視していた。瞬間風速の勢いで昇進を認めてしまう現在の取り決めに問題がある。平幕力士が横綱を破ると金星と評されるが、「金の価値」を下げぬようにしなければいけない。

<2> 大関を破っても価値がない

稀勢の里が辛うじて 10 勝 5 敗の成績を上げはしたが、途中休場の琴欧洲を筆頭に大関陣の成績は目を覆うようなものだった。途中休場になった琴欧洲の今場所の成績は 1 勝 5 敗 9 休。場所を順に遡って見ると 10 勝 5 敗・9 勝 6 敗・2 勝 4 敗 9 休・9 勝 6 敗・8 勝 7 敗・8 勝 7 敗という出来栄で、もはやコメントもしたくない。

稀勢の里は相変わらず腰高が是正されず、狙って下さいと言わんばかりのガラ空きの脇では勝てるはずがない。自分の得意とする勝ちパターンの「自分の型」が未だに確立できず、力まかせと好運による星だけではこんな程度が限界かもしれない。

関脇以下の力士が大関以上を破ると、インタビュールームでヒーローインタビューが行われる。大関全員で 24 個もの黒星をばらまいては、ヒーローの価値もない。通常ならば「大関 X 人を破った」という力士が褒め称えられるが、現状では称えるほどの価値はない。

<3> 抜け出したか豪栄道・栃煌山

豪栄道の相撲は、これまでの器用に何でもこなし、土俵際でも何かをやってくれるというところが目だったが、今場所は「動きの速さ」と「相撲の巧さ」が目立ち、稽古の成果を感じさせた。しかしながら、不利になると我慢できずに引きに入ったり、下がりながら相撲をとったりする欠点が時々顔を出していたのが気になった。10 勝 5 敗の成績を上げたが、この欠点が是正できていればあと 2 勝ぐらいは上積みできたような気がする。ともかく、土俵に上がってから下りるまでの間の顔つきが「勝負に挑む力士の顔」になってきた。相撲協会もマスコミも、ここで慌てて星勘定だけをして「大関取り」と騒ぎたてることなく、関脇としての安定した相撲内容が達せられるのをじっくり見守るべきと思う。

栃煌山も豪栄道と同じように今場所一皮むけた感じがした。これまでの両差し一辺倒で、両差しができなければコロコロ負ける相撲がなくなって、前へ出て体で攻めて流れの中でまわしを取ったり、おっつけたりといった前進相撲に変身した。結果として自分より下位の力士には負けることなく 10 勝 5 敗の成績を上げた。

これが来場所以降にも見られるようであれば楽しみだが、不安を感じさせるのも栃煌山なので要注意。今場所は関脇が二人とも勝ち越してしまったので、東小結で 10 勝 5 敗の栃煌山が次の番付でどんな処遇を受けるのか、気になるところだ。

<4> 平幕で目を引いた力士たち

妙義龍は先場所前頭筆頭で一点の負け越しで、今場所の番付は一枚落ちただけだった。中日までを不戦勝を含めて 3 勝 5 敗で折り返したが、後半を 5 勝 3 敗でまとめて何とか勝ち越しを果たした。前半戦を苦戦しても、後半戦の勝率が良く大負けせずに済む場所が多いが、追われる立場に強いということだろうか。実際に

相撲内容も悪くはなかったので、自分を信じて頑張れるタイプなのかもしれない。基本が身についた相撲スタイルだし、しかも堅実で正直な相撲なので、いずれ大きな花を咲かせるだろうと期待している。

西前頭三枚目に躍進した勢の初の上位挑戦は、4勝11敗という結果になったが、負けた相撲も含めて随所に勢らしい攻めと動きが見られた。逃げたり隠れたりしない真っ向相撲なので、来場所以降にいずれは壁を突き破りそうな相撲っぷりだった。豪栄道・松鳳山と並んで土俵上の表情が良い力士の一人である。

北太樹と富士東は地味ながら着実に力を付けて来ている感じがした。北太樹は10勝5敗、左四つの型を持っており、前みつを取って腰を低くしての攻めが身についている。相撲の流れがきれいだし、けれん味のない相撲は見る人に感動を与える。初三役を目指してさらなる躍進を期待したい。

富士東は、大勝ちこそしてはいないが五場所連続勝ち越しは立派である。突き押しか四つ身か中途半端な相撲だったが、今場所は前へ前へと圧力をかけて行く相撲に徹するようになってきた。

西前頭16枚目つまり幕尻まで下がってしまった若の里、ことによると・・・と不安がよぎったが。

初日からさすがに若の里と言えるような相撲が見られ、ほっと安心。途中で息切れの日もありはしたが9勝6敗で締めて、ことによると・・・にはならず済んだ。雅山が負け続けて、結果的に引退ということになってしまったが、若の里の相撲がまだ見続けられそうで安心した。次世代を担う若手の旭秀鵬や常幸龍を破った相撲は、「若の里ここにあり」という感じがした。こういう力士に敢闘賞をあげても良いのではないか。旭天鵬と二人で、来場所以降も長寿ゆえの記録を更新してもらいたいものである。

<5> 殊勲賞なし技能賞なし

日馬富士に土を付けて、荒れる春場所のきっかけを作った高安は5勝10敗。この横綱に二つ目の黒星を付けて白鵬の独走のきっかけを作った千代大龍は7日目から休場。白鵬が全勝をしたこともあり、殊勲賞に該当する力士はいなかった。強い横綱が君臨していると殊勲賞がない場所ができてしまう。

おまけにこの場所は技能賞にノミネートされていた豊ノ島が千秋楽に負け越してしまい、技能賞も該当者なしという結末になり、隠岐の海（東前頭7枚目）の敢闘賞だけという寂しい三賞になった。今場所の隠岐の海は腰も下りていて、大きな体と柔らかさを活かした相撲が光っていたが、この力士は好不調の波が激しく二場所続けて好成績だったことがない。大鵬の若い頃に良く似た、大きく柔らかい体は多くの解説者が期待しているようだが、なかなか良い結果を生み出すことができない。稽古が足りないせいだろうか。

今場所のように三賞選考が難しい時の盛り上がり改善策として、また相撲人気の復活を目指して、新しい賞を設定したらどうだろうか。「星勘定に関係なくその場所を盛り上げた力士」または「観客席の投票による敢闘精神に溢れてお客様を大いに喜ばせた力士」などへの特別賞など検討する価値があるような気がする。

<6> 千秋楽が面白かった

千秋楽の各段の優勝決定戦は色々な意味で面白かった。

十両は旭秀鵬と東龍のモンゴル出身力士同士の決定戦となり、旭秀鵬が優勝した。優勝決定戦で物言いが付くという、観客席から見れば面白い熱戦となった。幕下は木瀬部屋の亀井がすんなりと優勝。

三段目の優勝決定戦では、怪我の為幕内から陥落していた28歳の土佐豊が若力堂を下した。

序二段の優勝決定戦は9人で行われたが、9人から3人に絞られた上で巴戦になる。見ていても大変だったが、実際に戦う力士はもっと大変だったことだろう。おまけに最終戦は同じ立浪部屋同士の戦いになったのも面白かった。優勝した鬼怒ノ浪は表彰式の段階でまだ汗びっしょりの状態だった。

序の口の優勝は宮城野部屋の石浦、白鵬の付け人で直弟子。白鵬が、NHKの優勝力士インタビューに応える中でこんなことを語っていた。

「今場所の優勝にはもうひとつうれしいことがあります。内弟子の石浦君が序の口で優勝しました・・・。」満員の観客を動員して元横綱大鵬のために黙祷を捧げたことにも驚いたが、この一言も白鵬の人柄を表すような一言だった。

以上